

四九〇一 「今中」

處は以て中を含む、中なる者は處に幹たる者なり、

四九〇二

時は以て今を開く、今なる者は時に活する者なり、故に

四九〇三

塊塊は物を容れ、中能く之を維す、

四九〇四

衰衰は期を率い、今能く之を運す、而して

四九〇五

維する者は能く没す、

四九〇六

運する者は能く見る、故に

四九〇七

宇宙は其の塊塊を露さず、

四九〇八

宙率は其の衰衰を見さず、

四九〇九

物立ちて中を認む、

四九一〇

時運して今を見す、

四九一一

既已に物を露すれば、則ち小の小と雖も、猶お破る可きなり、唯

四九一二

中は則ち破る可からざるなり、破る可からざる者に非ざれば、

四九一三

奚んぞ天地を載せて撓まざるを得ん、

四九一四

既已に頃を刻すれば、則ち短の短と雖も、猶お剖く可きなり、唯

四九一五

今は則ち剖く可からざるなり、剖く可からざる者に非ざれば、

四九一六

奚んぞ萬露を湊めて遺さざるを得ん、

四九一七

神は用いざる所莫し、故に時期は各通じて、

四九一八

時は往き期は來る、來る者は將に當らんとす、

四九一九

往く者は既に違す、而して今は則ち將既の會する所なり、

(PB 365)

四九二四 \* 物は體せざる所莫し、故に處物は各立して、

四九二五 處は容れ物は居る、居れば則ち之に乗る、

四九二六―二七 容れば則ち之を載す、而して中は則ち乗載の所在なり、故に

四九二八 時に隱見有り、

四九二九―三〇 處に没露有り、没處は、則ち萬根の託する所なり、

四九三一 氣を發して給するに疲れず、

四九三二 質を收めて容るるに充たず、

四九三三 見時は、則ち衆神の遊ぶ所なり、

四九三四 來るを迎えて當るに遺さず、

四九三五 往くを送りて違うに停らず、故に

四九三六―三七 時は神物に路す、而して今は當遇の天を爲す、

四九三八 塞がる者は、通に待たざる能わず、

四九三九 通ずる者は、塞に偶せざる能わず、

四九四〇 塞がる者は、維して住す、故に通ずる者は當りて移る、

四九四一 通ずる者は、進みて率ゆ、故に塞がる者は追いて従う、是を以て

四九四二 塞がる者は、直ちに通ずる、

四九四三―四七 通ずる者は、直ちに塞がる、故に一塞中に住移有り、

四九四五 一通中に率従有り、

四九四六 従がう者は、氣來る有り、

(1433b)

四九四七  
 四九四八  
 四九四九  
 四九五〇  
 四九五一  
 四九五二  
 四九五三  
 四九五四  
 四九五五  
 四九五六  
 四九五七  
 四九五八  
 四九五九  
 四九六〇  
 四九六一  
 四九六二  
 四九六三  
 四九六四  
 四九六五

率ひきいる者ものは、氣き 往ゆく有あり、  
 氣きは來らいを以もつて生せいし、往おうを以もつて化かす、故ゆえに  
 塞そく氣き 來きたるを以もつて常つねに活かつするは、神しんの爲いなり、  
 通つう氣き 往ゆくを以もつて常つねに通つうずるは、天てんの成せいなり、  
 來きたる者ものは能よく去さる、  
 往ゆく者ものは能よく住じゆうす、故ゆえに  
 塊おう塊おうの間かんは、往おう住じゆうせざる莫なし、  
 衰こん衰こんの中ちゆうは、來らい去きよせざる莫なし、  
 往ゆく者ものは來きたる者ものに當あたりて、往ゆく、  
 來きたる者ものは往ゆく者ものに遇あひて、去さる、  
 當とう遇ぐうの會かい。時じは則すなわち今こんを爲いす、  
 事じは則すなわち命めいを成せいす、  
 今こんの既すでに過すぎたるを、前ぜんと曰いう、  
 今こんの末いまだ及およばざるを、後ごと曰いう、  
 送そう迎げいの囿ゆうする所ところを除のぞけば、則すなわち均ひとしく今こんなり。  
 神しん機きは來きたるに活かつす、  
 天てん跡せきは往ゆくに成なる、故ゆえに  
 今こんを以もつて前ぜん後ごを觀みれば、猶なお中ちゆうに居おりて左さ右ゆうを觀みるがごとし。  
 精せいは窺うかがい難がたし、

(PB 366)

四九六六

麿は知り易し、是を以て

四九六七

縦い神の來る有るとも、而も物の往く無く、

四九六八―六九

物の往く有るとも、而も神の來る無くんば、則ち何を以てか當遇の今を得ん、

四九七〇

天地は今を得て見る、

四九七一

事物は今を得て成る、故に

四九七二

機跡は始終を見し。時處は無窮を成す。

四九七三

性は物外に立たず、

四九七四

物は性外に成らず、

四九七五

處は神物に宅し、而して中は乗載の地を爲す、

四九七六

今なる者は、往くを送り來るを迎え、將にする者を前にす、

四九七七

既にする者を後にす、

四九七八

時なる者は、彼此 相に向う、

四九七九

彼の前とする所は、我の後とする所にして、而して

四九八〇

我の前とする所は、彼の後とする所なり、是の故に

四九八一

往く者は將にせんとするに向いて既にするに背く、

四九八二

來る者は將にせんとするを離れて既にするに就く、

四九八三

地なる者は、彼此 相背く、

四九八四

午の上とする所は、子の下とする所にして、而して

四九八五

子の上とする所は、午の下とする所なり、是の故に

(1434a)

四九八六

午なる者は午を上にして子を下にす、

四九八七

子なる者は子を上にして午を下にす、

四九八八

其の事は則ち反す、

四九八九

其の理は則ち同じ、故に

四九九〇―一九一

來る者よりして之を謂えば、則ち既往を前にす、而して

四九九二

往く者よりして之を謂えば、則ち率いて往く所を前にす、而して

四九九三―一九四

往く者よりして之を謂えば、則ち率いて往く所を前にす、而して

四九九五

遇いて去る所の者を後にす、

四九九六

故に來る者は迎うを見て去る、

四九九七

往く者は送るを見て伴う、

四九九八

來りて將に去らんとするの頃にして見る、

四九九九―一〇〇

將來既去なる者は則ち隠る、故に生する者は將にせんとするに居る、

五〇〇一

化する者は既にするに去る、

五〇〇二

通に非ざる者莫ければ、則ち往くとして生化に非ざる莫し、

五〇〇三―一〇四

往くとして生化に非ざる者莫しと雖も。而も精麤没露は物を異にす。

五〇〇五

則ち其の跡は各、同じからざるなり。故に

五〇〇六

期の有る者は、生化に跡有り、

五〇〇七

期の無き者は、生化に跡無し、故に

五〇〇八

將にせんとするに生ずれば則ち來りて化に向う、

(PB 367)

五〇〇九

既にするに化すれば則ち去りて生より遠ざかる、

五〇一〇

既に生すれば則ち起りて往くに從う、

五〇一一

化を爲せば則ち及ばずして息む 故に

五〇一二

物に中外有り、

五〇一三

期に始終有り、

五〇一四 一五

既に生ずる者は、則ち送るを見て伴う、伴ないて及ばず、以て其の化を觀る、

五〇一六 一七

始まりは既にするに在り、終わりは將にせんとするに在り、

五〇一八 一九

將に生ぜんとする者は、則ち迎うを見て來る、來りて停まらず、以て其の化を觀る、

五〇二〇

始まりは將にせんとするに居り、終わりは既にするに當る、

五〇二一 二三

中なる者は氣を吐き質を喻う、虚に遠く實に近し、故に氣は吐を見て發す、

五〇二四

質は喻を見て收む、

五〇二五

吐に遠く喻に近きの地にして没す、

\* 五〇二六 二七

之を吐し之を喻する者は則ち露す、故に解る者は外に遊ぶ、

五〇二八

結ぶ者は中に依る、